

”非球形粒子の回転エネルギー”の数式解説 (“compute_erotate_asphere.cpp”)

Open DEM Japan

2025年6月30日

本節では、離散要素法 (DEM) コードにおける `compute_erotate_asphere` アルゴリズムの物理量——とくに非球形粒子の回転運動エネルギー——を式で整理する。粒子集合 \mathcal{G} の各粒子 j について角運動量 \mathbf{L}_j が与えられているとする。粒子が持つ幾何学形状に応じて慣性モーメントを決定し、それを用いて回転エネルギーを評価する。シミュレーション内部単位からエネルギー単位への変換係数を κ_{mrvv2e} とすると、全回転エネルギーは

$$E_{\text{rot}} = \frac{1}{2} \kappa_{\text{mrvv2e}} \sum_{j \in \mathcal{G}} \boldsymbol{\omega}_j^T \mathbf{I}_j \boldsymbol{\omega}_j, \quad (1)$$

ここで $\mathbf{I}_j = \text{diag}(I_{1j}, I_{2j}, I_{3j})$ は粒子 j の主慣性モーメント対角行列、 $\boldsymbol{\omega}_j$ は粒子の剛体回転角速度 (粒子固有座標系) である。以下では \mathbf{I}_j と $\boldsymbol{\omega}_j$ の求め方を形状別に示す。

■(i) 三軸楕円体粒子 半径 (半径長) を a_j, b_j, c_j 、質量を m_j とすると、対角主慣性モーメントは

$$I_{1j} = \frac{m_j}{5} (b_j^2 + c_j^2), \quad I_{2j} = \frac{m_j}{5} (a_j^2 + c_j^2), \quad I_{3j} = \frac{m_j}{5} (a_j^2 + b_j^2). \quad (2)$$

粒子の姿勢を示す四元数 \mathbf{q}_j から回転行列 $\mathbf{R}_j(\mathbf{q}_j)$ を構成し、ラボ座標系の角運動量 \mathbf{L}_j を粒子固有座標系に写像して

$$\mathbf{L}_j^{(\text{body})} = \mathbf{R}_j^T \mathbf{L}_j, \quad (3)$$

成分毎に

$$\omega_{ij} = \frac{L_j^{(\text{body})}}{I_{ij}} \quad (i = 1, 2, 3) \quad (4)$$

を得る。式 (??) に代入することで楕円体の寄与を計算する。

■(ii) 細長線状粒子 (棒) 長さ ℓ_j 、質量 m_j の一様細棒について、中心を通る任意の軸に対する慣性モーメントは

$$I_j = \frac{m_j \ell_j^2}{12}. \quad (5)$$

ここでは棒の主慣性が等方と仮定されるため $\mathbf{I}_j = I_j \mathbf{I}_3$ (\mathbf{I}_3 は 3×3 単位行列) と置き、ラボ系での角速度 $\boldsymbol{\omega}_j$ をそのまま用いて

$$E_j^{(\text{rod})} = \frac{1}{2} I_j \|\boldsymbol{\omega}_j\|^2. \quad (6)$$

■(iii) 多面体（三角形メッシュ）粒子 ポリゴンメッシュにより近似された剛体の主慣性モーメントは事前計算され

$$\mathbf{I}_j = \text{diag}(I_{1j}, I_{2j}, I_{3j}), \quad (7)$$

四元数 \mathbf{q}_j により (??) と同様に $\mathbf{L}_j^{(\text{body})}$ を求め、式 (??) から $\boldsymbol{\omega}_j$ を得る。そのうえで

$$E_j^{(\text{poly})} = \frac{1}{2} \sum_{i=1}^3 I_{ij} \omega_{ij}^2. \quad (8)$$

■(iv) 総和 各粒子の形状に応じて (??)–(??) で得られたエネルギー密度を加算し、最終的に単位変換係数を掛けたものが式 (??) に示す E_{rot} である。ここに含まれる $\kappa_{\text{m}v^2e}$ は質量・速度の次元を持つ量 mv^2 からエネルギー単位へ変換する定数である。